

大学生が自立するために求められる、親との関係

—相補的關係モデルと切り替えモデルの逆転—

小原 一馬・古堀 晴菜

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第6号 別刷

2019年8月9日

大学生が自立するために求められる、親との関係[†]

—相補的關係モデルと切り替えモデルの逆転—

小原 一馬*・古堀 晴菜*
宇都宮大学教育学部*

大学生に求められる自立に関し、精神的自立に関する三つの尺度（①非共依存、②個の相互承認、③協調的対人関係）と経済的（生活的）自立と身辺処理の五つの尺度を作成し、これらの自立尺度に対して、親からの自立（信頼と脱依存）がどのように影響しているか見た。その結果、田中（2010）の言う親からの自立の二つのモデル（相補的關係モデルと切り替えモデル）の双方をミックスしたものとなった。さらにこれを男女別に見た場合、男子では相補的關係モデルに近く、女子では切り替えモデルにより近くなっていた。これは田中（2010）における就職後の調査結果と正反対のものであった。

キーワード：大学生の自立，自立尺度，親からの自立

本稿の目的は、大学生の段階で、親から自立することが、本人の全般的な自立にどのような影響を与えているか、また親とどのような関係にあることが親からの自立に役立つのかを調べることである¹。

「大人」になることの難しさ、複雑化

近年、学校を卒業しても親元から離れず、経済的にも独立できない若者や、安定的な雇用を得られない若者、さらには家に閉じこもり、社会との関わりを全面的に断ち切ってしまう若者など、若者の自立に関する問題が社会的な関心を集めている。このような若者の自立問題は「パラサイトシングル」「フリーター」「ニート」「ひきこもり」といった新しい言葉を生んだ。このような現象は日本だけの問題ではなく、先進国全般で見られる現象だ（ニューマン2013、パットナム2017）。

その背景には、先進国全体で広がっている①高学歴化、②晩婚化・未婚化、③就職の不安定化、④格差の拡大、⑤社会規範の個人化といった現象が存在

している（宮本2004、溝上・松下2014）。①～②によって子どもを扶養する親の役割が長期化する一方、ヨーロッパではもともと比較的高い水準にあった若者の失業問題は、新自由主義の流れにより公的責任から個人・家族責任への転換が進んでいった（宮本2004）。一方、日本においては90代半ばよりバブル崩壊の余波と規制緩和により、若者の失業率の急上昇と労働の非正規化が進んでいった（③）。これらそれぞれの状況において、どちらにおいても④の格差の拡大と⑤の社会規範の個人化により「大人への道筋」の移行過程の多様化が進み、決まりきったモデルがなくなり「正しい自立」の在り方が見えなくなるという状況を引き起こしている。

本稿の関心は、こうした社会状況において、高学歴化の影響の真ただ中にある大学生が様々な意味での自立を進めていく上で、どのような親との関係を持つことが有効なのかを明らかにすることにある。

自立を測る方法

自立とは、意思決定における自己決定権と、遂行における自己管理能力のことであり（上野1998）、経済的自立・生活的自立・精神的自立の三要素があるとされる（上野1998、天野1998、高坂・戸田2003）。また、量的データから自立の構造をとらえるため行われた尺度化の研究においては、生活身辺自立の側面を含む研究（渡邊1991b、1992、福島

[†] Kazuma KOHARA* and Haruna FURUBORI* : The desirable relationship with their parents for university students' independence
Keywords: Independence of University Students, Independence Scale, Independence from Parents
* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: koharak@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

1992、1996) や、それらに加えさらに社会的自立の側面を含む研究(大石・松永 2008)がある。渡邊は、これまでの自立の研究が男子中心の視点で行われ、生活身辺的な自立が軽視されてきたことを指摘し、自立獲得には生活身辺的行動の自立も重要であると述べている(渡邊 1992)。一方で大石・松永は、これまでの自立の研究に、自立問題を親との経済的関係や、雇用状況などの社会経済的要因との関連においてとらえようとする視点が反映されていないことを指摘し、心理的内容に偏らない自立尺度が必要であると述べている(大石・松永 2008)。

大石・松永(2008)は、上記のような自立に関する先行研究および、大学生・大学院生に「自立するとはどういうことだと思いますか」とたずねた予備調査の自由記述をもとに作成した質問紙に基づき、大学生に対して行った結果の因子分析を行っている。その結果から「主体的自己」「協調的対人関係」「社会的関心」「生活管理」「生活身辺処理」「経済的な自活」「共生的親子関係」という7因子に基づく尺度化が行われた。このうち「主体的自己」「協調的対人関係」「共生的親子関係」が精神的自立に、「社会的関心」が社会的自立に、「生活管理」「生活身辺処理」が生活的自立に、「経済的な自活」が経済的自立にあたる。

これらの尺度の妥当性を判断するため、大石らは自尊感情得点との間の相関を見ているが、「社会的関心」「経済的な自活」の相関が相対的に小さかった(それぞれ0.10、0.12、他は0.15以上)。「社会的関心」との相関は女子で有意ではなく、「経済的な自活」は両性とも比較的低くなった。この相関が小さかったのは、恐らくこの尺度を測るために用意された質問がそれぞれの種類の自立を測る上での妥当性に欠けていたからだと考えられる。

本稿では、後に見るようにこの大石らの作成した自立尺度に基づき自立の程度を測定しているのだが、「経済的自立」に関しては、「家にお金を入れている」「大学の学費を自分で払っている」「自分で生活できるだけの収入を得ている」という質問が、現在の大学生の現状に合っていなかったためと考え、事前に宇都宮大学の学生にインタビューを行い、そこで比較的多く出た「アルバイトをしていない(逆転)」「欲しいものは自分で働いて得た収入のみで買っている」「親から経済的援助を受ける(受けている)場合、返済する約束のもと援助を受ける(受

けている)」という質問に置き換えた。

一方、「社会的自立」に関しては、「日本の政治に関心がある」「社会の出来事に関心がある」「新聞を読む」という質問で自立の程度を測ろうとしていたのだが、これらも大学生の自立の実感とは離れていたものと考えられ、自尊感情得点との相関ももっとも小さかった。今回の我々の調査では、この社会的自立について異なった質問により計測することも検討したのだが、結果的には尺度化を断念することとなった。これは決して社会的自立という側面を認めないということではなく、これに代わる適切な質問を準備できなかったためである。

なお、精神的自立のうちに、主体性と協調性の双方の側面が含まれているのには、背後にアサーションの考え方が社会に浸透してきたためと推測できる。アサーションとは1950年代にアメリカで提唱された考え方で、自己主張が苦手なために苦しんでいる者の行動療法のトレーニングとセットとなって開発されていったものである(金田・中田2003)。アサーションはもともと英語の「主張する(assert)」という言葉に基づく日常語の一つであるが、こうした行動療法の専門用語としての「アサーション」という概念には「自分の権利とともに、相手の権利も尊重しつつ、思っていること・考えていることを(攻撃的ではなく、交渉として)素直に表現する」という意味がこめられている(金田・中田2003)。このようにアサーションには、単に自己の利益のために相手を動かすというのではなく、それを攻撃的ではなく相手を重んじながら行うという考え方がある。そのような考え方が自立における「主体性」と「協調性」という二つの尺度に現れているものと推測される。

このように大石らの「主体的自己」「協調的対人関係」に関する質問はアサーションにおける肯定的側面を表している一方で、自他の権利を守るために相手を拒絶するという観点が十分に反映されていなかった。そのような観点を反映させるため、本稿では共依存の問題を診断するために作成された質問紙の項目を利用することとした。共依存とは、「他人に頼られていないと不安になる人と、人に頼ることでその人をコントロールしようとする嗜癖的な人間関係(斎藤 2003)と定義されているが、共依存の問題は社会的ひきこもりの中心的なメカニズムの一つと考えられており(山本2009)、親子関係の自立とより一般的な意味での自立とをつなぐ一つの経路

としても重要だと考えられる（加藤1999）。

なお七つの自立尺度のうち最後の「共生的親子関係」については、本稿の目的に沿い、親からの自立の変数として、一般的な自立を説明する変数として独立させた。

自立過程における望ましい親子関係

さてその親からの自立の程度を測る変数をどのように設定するか、次に検討したい。

宮本（2004）は、20代の若者の親子関係は「半依存・半自立」を経て、対等で対恵の関係の特徴とする中期親子関係に達するという発達観・移行観を提示している。20代の若者は「親への依存」から「親からの自立」への転換をし、それまでの親子関係において親が担ってきた役割は小さくなり、親も子どもも同等に役割を担うようになるということである。また、正岡（1993）によれば、20代の若者と親との関係は、親も子どももともに成熟した大人として、社会的な相互作用を期待される関係、すなわち互いに機能的に自立し、情緒的な交流を深め合うような関係へ変容を遂げると想定されてきた。しかし、実際の様々な調査から、20代の親子関係の実態では、たとえ子が就職していても同伴行動や家事・金銭的援助が変わらず継続し、それらの相互作用を通して、情緒的な親密性が維持されていることが明らかにされている（岩上2005）。つまり、実際の20代の親子関係は依存から自立へ転換しておらず、子が親へ一方的に依存する状態から親子相互に依存的な関係へ変化していることが分かる。

若者から見て両親という存在と、友人や特に親密な他者（恋人）の存在がどのように位置づけられるかについて、従来の議論では大きく二つのモデルが提唱されている。田中（2010）によれば、それぞれ「切り替えモデル」と「相補的關係モデル」であり、両モデルの相違は「成人への移行」観と親と友人の關係のバランスという二点に集約できる。第一の「切り替えモデル」とは、アングロサクソン型の社会の自立観を主なモデルとしており、自立の過程で若者にとっての「重要な他者」が母親から同性の友人を経て異性の友人へと移行し、異性の友人・配偶者（恋人）との關係が強まると想定するものである。つまり、若者は発達過程において、親から友人へ、さらにパートナーへといたる重要な他者の切り替えを行うと主張されている。第二の「相補的關係モデル」

とは、生涯発達心理学の立場から主張されるモデルであり、誕生時から継続している安定的な教育者との愛着關係は、成人子の主観的狀態をよい狀態に保ち、友人や恋人など親密な他者との対人關係を円滑にし、安定的なパートナーシップの獲得にプラスの効果をもたらすと想定するものである。つまり、発達過程において親子の愛着と友人關係とは競合せず、相補的な關係にあると主張されている。

二つのモデルでは若者にとって望ましい親子關係のあり方が異なり、前者では親と友人が「重要な他者」として競合し、親の影響が小さく限定的になることが望ましいとされる。一方後者では、良好な關係の親と友人はどちらも若者にとって重要かつ相補的關係にあり、親の影響力が一定の狀態で持続することが望ましいとされる。また親と友人から得られる情緒的なサポート量とバランスについても両モデルには違いが見られる。田中の解釈によれば、前者では、サポートの量もバランスも親から友人への切り替え、つまり親から受けるサポートの方が多い狀態から、友人から受けるサポートの方が多い狀態へ変化することで「成人への移行」を論じている。一方後者では、親と友人いずれについてもサポートの量が多いことに価値をおき、その上でバランス、つまり親が中心の構成から、友人や恋人を含む対人關係をバランスよく保持できるようになることで「成人への移行」を論じている。つまり、発達過程において親や友人とどのように關係をとりもつことが成人として望ましいのか、発達観や主張が異なる二つのモデルがあるということだ。

田中（2010）はどちらのモデルの狀況が若者にとって「自立」に繋がっているか、東京都府中市と長野県松本市の20代の未婚者を対象とした調査から分析を行っている。まずサポートの量を見ると、男性よりも女性の方がいずれの提供者からもサポート量が多く、また男女とも父親よりも母親からより多くのサポートを受け、友人では学校や職場の友人よりもそれ以外の友人からより多くのサポートを受けているという結果だった。個人とサポートの量を見ると、府中では一人暮らし、高学歴、恋人がいる者ほどそうでない人に比べて友人からの情緒的サポートを多く得ており、松本では本人の就労形態、年収、恋人の有無が友人からの情緒的サポート量に差を生むという結果だった。次にサポートの量やバランスと自立意識との關係を見ると、男性では地域にかか

ならず、離家経験があり恋人がいる者が自立しているという自覚が高かった。加えて、府中では親と別居し年取が高い者が、松本では友人からのサポートが多い者が、それぞれ自立しているという自己評価がより高い結果だった。女性では、府中においては親と別居、高年取、離家経験がある、友人サポートが多い者が自立の自己評価が高く、松本においては恋人の有無のみが自立の自己評価に影響しているという結果だった。

以上の結果を受けて田中は、女性は対人関係の中で、男性は離家や恋人獲得・キャリアなどの地位達成によって親から精神的自立を評価していることから、男性は「切り替えモデル」、女性は「相補的關係モデル」による自立過程の説明があてはまるとした。すなわち、自立意識と関連する要因は地域やジェンダーによって異なり、年齢や就業形態よりも対人

方法

調査は地方国立大学である宇都宮大学において、授業の中で質問紙を配布・回収することにより行った。調査対象者の学年構成は1年生50名、2年生48名、3年生24名、4年生31名、学年不明8名、計161名の学生である。学生の学部内訳は、教育学部100名、国際学部9名、農学部3名、工学部7名、地域デザイン科学部38名、学部不明8名であった。調査時期は、2018年12月から2019年1月である。

質問紙の全文は古堀（2019）を参照。

分析方法と作成した変数

最初に述べたように、本稿では大学生の自立に関して、親からの自立や一人暮らし、友人との関係などがどのような影響を与えているかを分析している。そのために次のようなモデルを作成した。

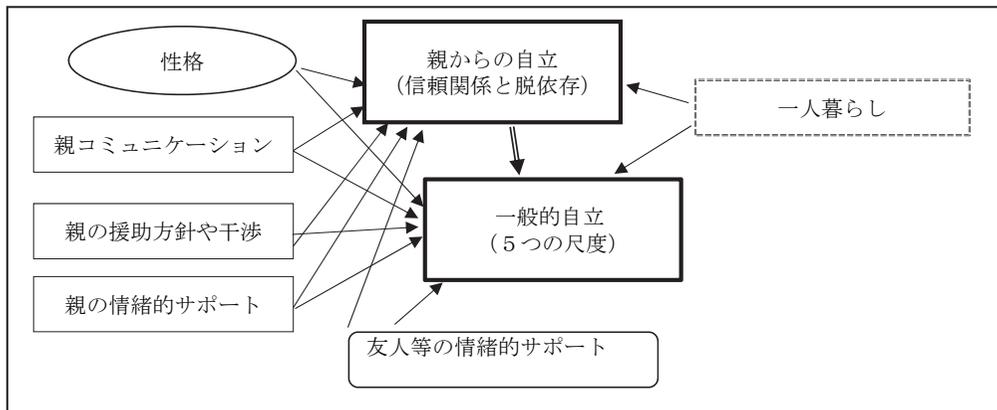


図1 分析のモデル

関係の状況が精神的自立に対する自己評価により影響していたと述べられている。

田中の調査ではあてはまる自立モデルが性差により異なるという結果を得ているが、性差は収入にも影響を与えている。そのため女性の場合、低収入を理由に親との情緒的関係を深めざるをえない状況が影響しているとも考えられる。在学中のため本人の収入に男女差が表れにくい大学生では、どちらのモデルがより「自立」に繋がっているのだろうか。さらに、学卒後の若者にとって過去の離家経験が親からの精神的自立に影響しているという結果があるが、この離家経験には在学中の経験が含まれると想定できる。では、大学生の現在の離家経験は自立に影響しているのだろうか。これらについて、本論の調査で見ていきたい。

① 自立尺度の作成

まず自立に関する尺度の作成方法を説明しよう。先に説明したように、大石らが作成した5つの自立尺度に沿って質問を3から4選択し、大学生が回答しやすいように項目の一部をより具体的な文章に変更した（質問紙A-1（ア）～（セ））。さらに共依存に関する前田ら（2007）の尺度から、一般の学生にあてはまりやすいと考えられる質問項目を使用した（質問紙A-1（ソ）～（ト））。

これら20項目を因子分析にかけたのが次の結果である。スクリープロットに基づき因子数5を選択、共通性が0.1未満の項目はなかった。パターン行列は見やすくするため0.1未満の表示を抑制している（主因子法、プロマックス回転 抽出後の負荷量平方和 累積寄与率36.0%）。

表 1 自立に関する項目の因子分析（パターン行列）

	因子				
	1	2	3	4	5
チ) 相手に合わせる	.665				
テ) ノーと言えない	.644		.128		
ツ) 相手の気持ちを考えすぎる	.531	.216		.147	
ト) 問題のある人間関係に巻き込まれる	.500	-.177			
オ) 責任ある行動		.752			
エ) 相手の気持ちを考えた言動	.318	.605			
夕) 人間関係失敗から学ばず繰り返す	.208	-.518	.100		
カ) 規則正しい生活してない	.103	-.347	-.312	.115	.129
セ) 親からの援助は返済約束のもと受けてる		.227	.212	.104	-.163
ス) 欲しいものは自分収入のみで買う	.158	-.144	.555		.154
シ) バイトしてない		.170	-.538		-.164
キ) 自己の収支を把握			.486		-.189
ク) 蓄えをしていない		-.105	-.451	.126	
コ) 一人ですべていく自信ない			-.372	-.253	-.166
サ) 洗濯家族任せ			.247	-.814	
ケ) バランス考え自炊	.143			.591	
ク) 自分で掃除している			.290	.524	
ア) 人にも自分にもそれぞれの考えある					.701
ク) 他人と違う意見でも自分で決め貫く	-.107	.154	.156	.100	.379
イ) 周囲と良い関係維持	-.187	.235	.133		.282

表 2 自立に関する項目の因子分析（構造行列）

因子	1	2	3	4	5
1	1.000	.185	.008	-.090	-.139
2	.185	1.000	.376	.118	.190
3	.008	.376	1.000	.230	.144
4	-.090	.118	.230	1.000	.171
5	-.139	.190	.144	.171	1.000

因子分析の結果、第一因子は精神的自立（非共依存）、第二因子は精神的自立（協調的対人関係）、第三因子は経済的（生活的）自立、第四因子は身辺処理、第五因子は精神的自立（個の相互承認）というべきものが析出した。この結果はもととなった大石らの自立の5尺度+非共依存に概ね合致しているが、一点だけ異なるのは大石らの因子分析では別れていた経済的自立と生活的自立が第三因子で一つとなっていることである。なおこの第三の因子は因子数を6に増やした場合も大石らと同じような形では分離しなかった。

精神的自立に関しては、①非共依存（第一因子）、②個の相互承認（第五因子）、③協調的対人関係（第二因子）という三つの側面が別々に析出した。そしてこれらは互いの相関も小さい。精神的自立の三つの側面の関係だが、①非共依存性であるということはすなわち否定的状況での自己主張としての、相手の拒絶と抵抗を、②個の相互承認は、肯定的状況で集団に埋没せず自己主張を行うことを、③協調的対人関係は、肯定的状況での他者との調和の追求と考えることができよう（図2）。ただし、②と③の関係は以下にみるような事情でどちらかといえば全体

的に「他者との調和」のほうに偏っていることに注意が必要である。

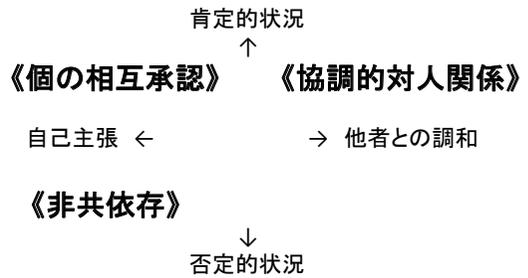


図 2 精神的自立の三つの尺度の関係

この因子分析結果に基づき、本論考では自立に關し①非共依存、②個の相互承認、③協調的対人関係、④経済的（生活的）自立、⑤身辺処理の5つの側面から測定することとし、以下のような方法でそれぞれの尺度を作成した。

まず①の非共依存だが、信頼性分析を行い関連する項目を足し引きした結果クロンバックのアルファが0.651で最も高くなるよう、「(チ) 相手を喜ばせようとして相手に合わせることもある(逆転)」「(ツ) 相手の気持ちを敏感に察知して、先のことを考えすぎてしまうことがある(逆転)」「(テ)「ノー」と言えず、頼みごとをつい引き受けてしまうことがある(逆転)」「(ト) 問題を感じる相手や人間関係に巻き込まれることがある(逆転)」の四つの項目をその尺度として用いることとした。

②の個の相互承認はクロンバックのアルファが0.49と最も高くなった(ア)人には人の、自分には自分の考えや意見がある、(イ)周囲の様々な人とよい関係を維持している、(ク)自分の意見や行動が人と違って、自分で決めて貫いているを作成した。このうち(イ)の「よい関係の維持」は、意味的には「協調的対人関係」とむしろ近いようにも思えるが相関関係としてはむしろ(ア)(ク)との質問との関係が強く、またこの(イ)を含めたほうがクロンバックの値も高くなったのでこちらに含めている。この尺度の「個の相互承認」という名前にはそのような意味での一種の協調性が表現されており、図2においてはより他者との調和に近いと考えられる。

③の協調的対人関係は、同様にクロンバックのアルファが0.69と最も高くなった「(エ)相手の気持ちを考えながら発言、行動している」「(オ)自分の

行動にともなう責任を考えながら行動している」の二項目を用いた。

④の経済的（生活的）自立は、クロンバックのアルファが0.60と最も高くなった（ウ）将来に備えた蓄え（貯金、生活に役立つ勉強など）をしていない（逆転）、（キ）自分で使うお金の収支を把握している、（シ）アルバイトをしていない（逆転）、（ス）欲しいものは自分で働いて得た収入のみで買っている、（ソ）自分一人でやっていけるという自信がない（逆転）の5項目を用いた。

⑤の身辺処理的自立についても同様に、クロンバックのアルファが0.63と最も高くなった「（ケ）日頃の自分の食事は、栄養バランスを考えたいので自分で作っている」「（コ）自分で部屋の掃除を定期的に行っている」「（サ）自分の洗濯物も、家族や同居人に洗濯してもらっている」の三つの項目を用いた。

② 親からの自立尺度の作成

次に親からの自立についてだが、親子関係を信頼関係と親密性という二つの視点から見ることで検討した水本（2018）の尺度を部分的に使用し（質問紙C-1（ア）～（ス））、因子分析を行った。

スクリープロットに基づき因子数2を選択、（ウ）「私には親とは異なる独立した考えがある」の共通性が0.1未満だったため取り除いた。パターン行列は見やすくするため0.1未満の表示を抑制している（主因子法、プロマックス回転 抽出後の負荷量平方和 累積寄与率40.2%）。因子間の相関はほとんどなかった（相関係数0.03）

表3 親からの自立に関する因子分析（パターン変数）

	因子	
	1	2
オ) お互いに親しみ感じる	.737	
シ) 親と関係良好	.733	
ア) 親は信頼してくれる	.731	
イ) 親の生き方支持	.729	
カ) 親を理解して行動	.630	
キ) 親を気遣う	.366	
コ) 親のアドバイスに従わないと後ろめたい		.706
ケ) 親の評価気になる		.659
ク) 親に賛成されないと不安		.635
サ) 親に相談なく自分だけで決心できない		.561
エ) 親の期待に捉われず行動	.195	-.528
ス) 精神的自立してる	.123	-.366

この結果、親との信頼関係を示す因子1と依存関係を示す因子2が析出した。この二つの因子は、親からの自立の二つの側面（信頼と脱依存）を示していると捉え、二つの尺度を作成した。

親との信頼尺度は、クロンバックのアルファが0.84と最大になった「（ア）親は私を信頼してくれている」「（イ）親の生き方を支持している」「（オ）親と私は、他人に対してよりもお互いに対して親しみを感じている」「（カ）親の立場や気持ちを理解して親に接している」「（シ）自分と親との関係は良好だと思う」五項目で構成した。

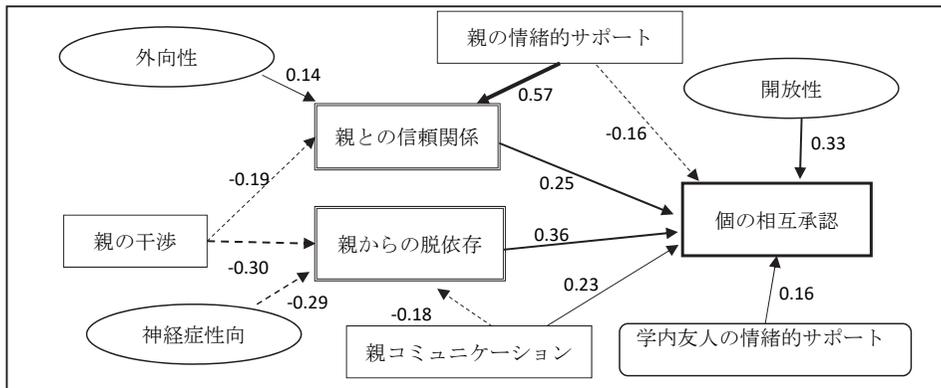
親からの脱依存尺度も同様に、クロンバックのアルファが0.75と最大になった「（エ）親の考えや期待にとらわれることなく行動している」「（ク）自分の意見や行動に親が賛成していないとき、不安を感じる（逆転）」「（ケ）親からどう評価されるか気になる（逆転）」「（コ）親のアドバイスに従わないと後ろめたい気がする（逆転）」「（サ）親に相談せずには、自分で決心できないことがある（逆転）」の五項目で構成した。

③ その他の変数

図1に見るように、自立には本人の性格が関係していると考えられる。性格に関しては、Big Fiveの五つの次元を十項目から測定するTen Item Personality Inventory (TIPI) の日本語版（小塩他2013）を用いた（質問紙A-2（ア）～（コ））。

親とのコミュニケーションの在り方については、父・母それぞれとの食事頻度、会話頻度、メールやSNSでの通信頻度、一緒に買い物の頻度、共通の趣味に携わる頻度をたずね（四件法）、それらの回答の合計点を点数化した（質問紙C-2（ア）～（オ））。

親を含め、周囲との人間関係については、田中（2010）にならい、情緒的支持を与えてくれる存在かどうかを変数として設定した。父親、母親、両親以外の大人、学校の人（小中高の同窓生も含む）、その他の友人、恋人の六つの項目を作成し、特に相関が大きかった父親と母親は一つの変数にまとめ、恋人については選んだ人が少なかったため、計算から省いた。サポートの具体的な内容としては、「①心配ごとや悩みを聞いてくれる」「②気持ちや考えを理解し尊重してくれる」「③能力や努力を高く評価してくれる」「④一緒にいて楽しく時間を過ごせる」「⑤助言やアドバイスをしてくれる」「⑥遊びに



なお共分散は図では省略している(以下同様)。例えば、親サポートと学内友人サポート、親サポートと親コミュニケーション、親コミュニケーションと親干渉、それに外向性と開放性の間には相関があった。

図3 個の相互承認尺度への影響関係 (全体)

誘うと気軽に応じてくれる」の六つの項目を使用し、当てはまる人がいる場合1点、そうでない場合は0点として加算した。①から⑤までは田中(2010)ほぼそのままであり(②だけ田中(2010)では「理解してくれる」だった)⑥を付け加えた(質問紙B)。

親の援助方針については、二つの質問「あなたの親は、あなたへの経済的援助(仕送りやお小遣い等)をどのような姿勢で行っていますか?」「あなたの親は、あなたへのサービス提供(家事を負担してくれる、あなたが必要とする手続きを代わりにしてくれる等)をどのような姿勢で行っていますか?」(質問紙Cカ、キ)のそれぞれの選択肢(1. 可能なかぎり援助する、2. 学費など基本的・最低限の費用を出し、状況や交渉によってはそれ以上の援助もする、3. 学費など基本的・最低限の費用は出すが、それ以上の援助はしない、4. 援助はほとんどしない)(1. 可能なかぎりのサービスを提供する、2. 決まったサービスを提供し、状況や交渉によってはそれ以上(それ以外)のサービス提供もする、3. 決まったサービスは提供するが、それ以上(それ以外)のサービス提供はしない、4. サービス提供はほとんどしない)の番号を合計して得点とした。

親の介入については、「あなたの親は、次の三つの側面についてどの程度あなたに干渉してきますか?」(質問紙Cク)を、金銭面、生活時間、交友関係のそれぞれについて4件法でたずね、合計を得点化した。

共分散構造分析結果

① 全体の分析

では自立に関する5つの尺度それぞれについて、どのように親からの自立やその他の変数と関係しているか見ていこう。

まず「個の相互承認」だが、これは親からの自立の二つの尺度(信頼関係と脱依存)双方と深く関わっていることがわかった。また親とのコミュニケーションも活発であることもポジティブな影響を与えている。

親との信頼関係を作る上では(当たり前だが)、親の精神的なサポートを受けている実感が特に重要であり、また親への依存から抜け出す上では、親に干渉を受けていないことも重要であることがわかる。ただし「個の相互承認」への直接効果としては、親からの精神的なサポートはネガティブな効果を与えており、親との信頼関係に基づくポジティブな効果をかかなりの部分を打ち消してしまっている。

田中の自立に関する二つのモデルで言えば、親との信頼関係が重要だという意味では「相補的關係モデル」と言えるが、親への依存から脱することの影響も大きく、学内友人のサポートもポジティブな影響があるという意味では「切り替えモデル」ともいえ、両者の性格がミックスされている。

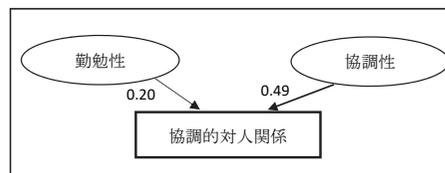


図4 協調的対人関係への影響関係 (全体)

② 男女別の分析結果

さてここまで全体の分析結果を見てきたが、男女別に見ていくと影響関係は大きく変わってくる。

社会人を対象とした田中（2010）の調査においては、男性で切り替えモデル、女性で相補的關係モデルとなっていた。社会人でこのような結果となったことの背景には、男女の収入格差が考えられていた。

ではまだアルバイト以外の収入がなく、学費などで親に頼ることの大きい大学生の状況ではどうなっているだろうか。

結論から言えば、社会人の結果ときれいに逆転する結果となった。

個の相互承認への影響関係から順番に見ていこう。

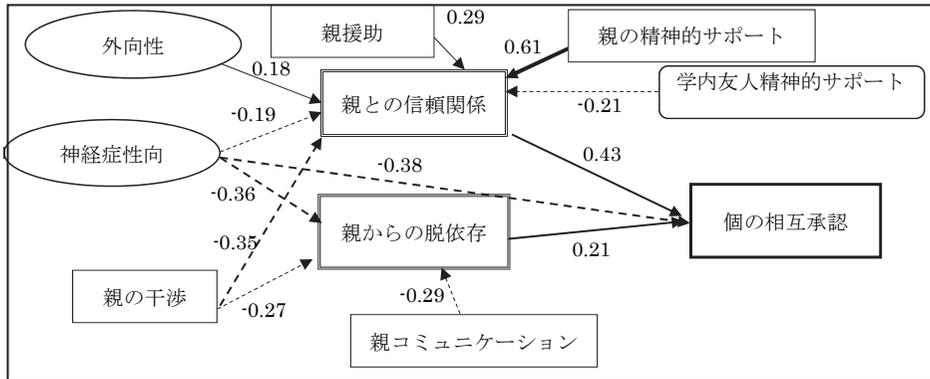


図8 個の相互承認への影響（男子）

男子の場合、親との信頼関係の影響がより多くなる一方で、親からの脱依存の影響がより小さくなり、学内友人の精神的サポートから個の相互承認への矢印が消えている。その意味でより相補的關係モデルに近づいている。

一方、女子では次の図を見ても分かるように男子と真逆の結果となった。親との信頼関係からの影響が消え、親からの脱依存の影響がより大きくなっている。また、親からの脱依存に対して、学内友人からの精神的サポートが影響を与えており、切り替えモデルの性格がより強くなっていることがわかる。

ティブな影響を（0.54）、学内友人の精神的サポートがネガティブな影響（-0.15）を与えていた。これらは親の援助や学内友人のサポートが十分でない場合、人間関係においてより細かい配慮が求められることを意味しているのではないかと考えられる。このような意味では、協調的対人関係の尺度は自立の指標としては妥当性に欠けている可能性が高い。

非共存性においては、男子では有意な影響を与える変数一つもなかった。一方、女子は全体の図式とほぼ同様の結果となった（図は省略）。

経済的自立に関しては、個の相互承認と同様男子で相補的關係モデル、女子で切り替えモデルに近づいていた。男子の場合、親との信頼関係の影響だけがあり、親からの脱依存の影響がなくなっている。親の精神的サポートの影響は直接的な影響と、親との信頼関係を通した間接的影響が打ち消し合っている。

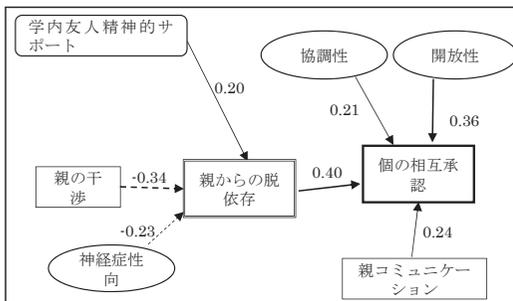


図9 個の相互承認への影響（女子）

協調的対人関係に関しては、男性の場合、外向性と親援助がネガティブな影響を（それぞれ標準化係数-0.20、-0.22）、勤勉性がポジティブな影響（同じく0.29）を与えていた。女子の場合は協調性がポジ

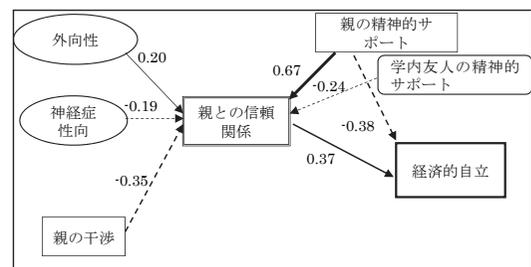


図10 経済的自立への影響（男子）

一方女子においては、親援助と一人暮らしの影響が大きく、親の援助方針がより厳しければ厳しいほど経済的に自立する傾向にある。また一人暮らしだと親に経済的には頼る必要が出てくる。学外友人の精神的サポートもプラスの影響を与えているが、これはおそらく実際には影響関係は逆であり、経済的自立のためにアルバイトにはげむことで、学外に友人ができやすいことを指しているのではないかと推測される。いずれにしても女子においては、より切り替えモデルの傾向が強まっている。

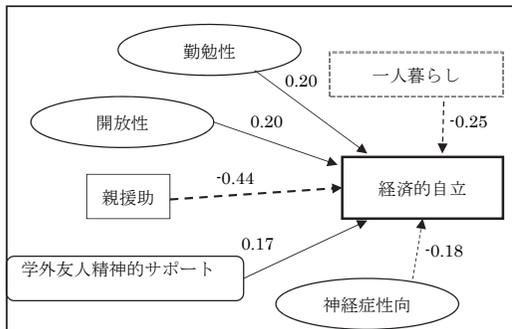


図11 経済的自立への影響（女子）

身辺処理に関しては、男子では一人暮らし（標準化係数0.78）以外では、学内友人サポートだけが有意な影響を与えていた（同0.19）。男子では料理をしたり部屋の掃除をしたりするかどうかは、ほぼ下宿するかどうかだけで決まり、学内の友人関係が良好な場合、おそらく友人を部屋に呼ぶなどのことをするため、そうしたことをするようになるのだろう。一方、女子は全体とほとんど同じ傾向を示した（図は省略）。

結果をまとめると、特に個の相互承認と経済的自立の尺度によく表れているように、男子では、親との信頼関係の影響がより大きくなる一方で、親からの脱依存の影響がより小さくなり、学内友人の精神的サポートの影響が消え、より相補的關係モデルに近づいている。一方、女子では親との信頼関係からの影響が消え、親からの脱依存の影響がより大きくなり、切り替えモデルに近づいている。

結論

大石, 松永 (2008) の自立尺度に関する質問紙をベースに、新たな自立尺度を作成した。その結果、精神的自立に関する三つの尺度（①非共依存、②個の相互承認、③協調的対人関係）と経済的（生活的）

自立と身辺処理の5つの尺度が作られた。これらの自立尺度に対して、親からの自立がどのように影響しているか見た。親からの自立に関しては、水本 (2018) の質問紙を参考に作成した二つの尺度（信頼と脱依存）を作成した。その結果、個の相互承認の尺度に関しては、親の信頼と親からの脱依存の双方、さらに学内友人の精神的サポートのプラスの影響が見られ、田中 (2010) の親からの自立の二つのモデル（相補的關係モデルと切り替えモデル）の双方をミックスしたものとなっていた。また非共依存、経済的自立の尺度については、親からの脱依存の影響が見られた。一方、協調的対人関係については性格の影響しか見られず、身辺処理に関しては一人暮らしかどうかの影響が特に大きく、親からの自立の影響はほとんど見られなかった。また親との信頼関係を築くには、十分な精神的サポートを受けつつ干渉は控えめに、親への依存から脱却する上では干渉とコミュニケーションともに控えめにすることが必要である。ただしコミュニケーションそれ自体は個の相互承認にポジティブな効果を与えており、全体的な自立をはかる上で減らすべきものではない。

さらにこれを男女別に見た場合、男子では、親との信頼関係の影響がより大きくなる一方で、親からの脱依存の影響がより小さくなり、学内友人の精神的サポートの影響が消え、より相補的關係モデルに近づいている（特に個の相互承認と経済的自立の尺度に関して）。一方、女子では親との信頼関係からの影響が消え、親からの脱依存の影響がより大きくなり、切り替えモデルに近づいている。これは田中 (2010) における就職後の調査結果と正反対のものである。ここから、年齢によって自立のモデルが男女で逆転するのか、もしくは男女の収入格差の影響を受けているのかが推測される結果となった。

この結果から、大学生の時点において男子は親との信頼関係をしっかり築いておくことが自立にとってより重要であり、そのために十分な精神的サポートを与えることが望ましいのに対し、女子においては親への依存から脱することが重要であり、そのためにはできるだけ干渉しないことが必要だということがわかった。

註

ⁱ 本論は古堀 (2019) の卒業論文の研究を発展させたものであり、質問票は小原の指導の下、古堀が

作成した。「自立過程における望ましい親子関係」の節はほぼそのまま古堀(2019)から転載しており、「自立を測る方法」の節も古堀(2019)を書き直したものであるが、それ以外の部分はほぼ小原が執筆し、データの分析も小原が行っている。

参考文献

- 岩上真珠 (2010) 『<若者と親>の社会学 未婚期の自立を考える』、青弓社
- 岩上真珠 (2005) 「少子・高齢化社会における成人親子関係のライフコース的研究——20代-50代:1991-2001年」、2001-04年文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
- 大石美佳、松永しのぶ (2008) 「大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成—」、鎌倉女子大学家政学部 昭和女子大学大学院生活機構研究科、日本家政学会誌、59、7、461-469頁
- 家計経済研究所編 (宮本みち子、岩上真珠、山田昌弘、米村千代) (1994) 「「脱青年期」の出現と親子関係——経済・行動・情緒・規範のゆくえ」、家計経済研究所
- 高坂康雅、戸田弘二 (2003) 「青年期における心理的自立 (I) - 「心理的自立」概念の検討」、北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要、4、135-144頁
- 高坂康雅、戸田弘二 (2006) 「青年期における心理的自立 (II) - 心理的自立尺度の作成」、北海道教育大学紀要 (教育科学編)、56、17-30頁
- 小塩真司、阿部晋吾、カトローニ ピノ (2012) 「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」、パーソナリティ研究、21、40-52頁
- 田中慶子 (2010) 「第3章 未婚者のサポート・ネットワークと自立」、岩上真珠 『<若者と親>の社会学 未婚期の自立を考える』、青弓社、65-78頁
- ニューマン、キャサリン・S (2013) 『親元暮らしという戦略』 荻原久美子・桑島薫訳、岩波書店 (Newman, Katherine S., *The Accordion Family: Boomerang Kids, Anxious Parents, and the Private Toll of Global Competition*, 2012, Beacon Press)
- パットナム、ロバート・D (2017) 『われらの子ども』 柴内康文訳、創元社 (Putnam, R.D., *Our Kids: The American Dream in Crisis*, 2015, Simon &

Schuster)

- 福島朋子 (1992) 「思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び性差の検討」、発達研究、8、67-87頁
- 福島朋子 (1993) 「自立に関する概念的考察—青年・成人及び女性を中心として—」、発達研究、9、73-8頁
- 福島朋子 (1996) 「成人における自立観—概念構成と性差・年齢差」、仙台白百合女子大学紀要、1、15-26頁
- 正岡寛司 (1993) 「ライフコースにおける親子関係の発達の变化」、65-77頁
- 水本深喜、山根律子 (2010) 「青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味—精神的自立・精神的適応との関連性から」、発達心理学研究、21、254-265頁
- 水本深喜 (2018) 「青年期後期の子の親との関係—精神的自立と親密性からみた父子・父娘・母子・母娘間差—」、教育心理学研究、66、111-126頁
- 溝上慎一、松下佳代 (編) (2014) 『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育』、ナカニシヤ出版
- 宮本みち子 (2004) 『ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容』、勁草書房
- 山田昌弘 (1999) 『パラサイト・シングルの時代』、筑摩書房
- 山田昌弘 (2005) 『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』、180-194頁、有斐閣
- ポスト青年期研究会編 (2004) 「親からみた20代未婚者の仕事・結婚・親子関係——「成人期への移行」に関する調査研究Part III」、ポスト青年期研究会
- 前田直樹、長友真実、田中陽子、三浦宏子 (2007) 「福祉系大学生における共依存と心理的健康」、九州保健福祉大学研究紀要、8、79-87頁
- 渡邊恵子 (1991b) 「自立と自己の性の受容—女子大学生の場合—」、日本女子大学紀要人間社会学部、2、83-95頁
- 渡邊恵子 (1992) 「自立と自己の性の受容 (2) —性差の検討—」、日本女子大学紀要人間社会学部、3、1-14頁

平成31年3月29日 受理

The desirable relationship with their parents for
university students' independence

Kazuma KOHARA, Haruna FURUBORI